

法然上人の口称念佛の一考察

井上 慶生

法然上人は立教開宗に當つて、「わが浄土宗を立つるは凡夫の報土に生るゝ事を示さんが爲なり……云々」とある如く、聖人ならぬ凡夫が、機根の優れたる者でない枝根の劣れたる者が、凡人ならぬ悪人が、すべての人が浄土往生を得る事が出来るようにとの立場から、それを宣言されたのである。かゝる凡夫の浄土往生の業は観念や学解による難行であつては困難であり、造寺造塔によつては貪者は救われぬ事になる。上人の選択された口称の念仏は造寺造塔よりも学解、観念の業よりもすぐれたものである。何となれば仏の本體であるから。しかしこれが勝なるものであつても難しいものであつては意味のないものとなる。勝であれば必ず易でなければならぬものである。選択集三章段には

念仏易故通於一切。諸行難故不通諸教、……云々

とあり、一切の人々の往生を保證しているが、上人が口称の念仏を唯一切の人々の浄土往生の爲でなく、自分自身の念仏として、自己の念仏として選択された事に注目する必要があらう。善導の念仏を絶対のものとして選択されたのであるが、それはその念仏が易なるもの勝なるものと云う受け取りではなく、それならば、指導浄土教の末流としてでしかなく、指導教の単

なる紹介者でしかなくなる。偏依指導とは、眞に自己を否定し、還愚痴の立場の自覺に徹して、他者としての立場から自己をふり返る事によつて、無限に自己を進展せしめて行く所にあるのであり、こゝに眞に法然上人自身の口林念仏となり得るのであり、こゝに於て既に偏依指導は偏依善導ではなくして、偏依法然とでも云うべきか、上人そのものゝ念仏となるのである。即ち、徹選択集には南無阿弥陀仏、往生之業念仏爲先を叙して、

先就本選択集之題。此有三義。所謂第一本選択集之題中、言念仏者、是諸師所立之口林念仏也。故題次行言南無阿弥陀仏也。第二本選択集之題中、言本願者、是召導所立之本願也。故題次行言南無阿弥陀仏也。第三本選択集之題中、言選択者、是然師所立選択念仏也。故題次行言南無阿弥陀仏也。

とあるは、この事を意味するものと云へよう。しからば法然上人は何故に召導に依つて口林念仏を自己の岸土往生の業とされたのであらうか。智恵第一の法然坊とまで云われ、天台の禪学の體ですら上人に教へを乞うたと云われるにもかゝらず、聖道門に依る往生の業を取らねなかつたのであらうか。そこには上人の深い自己反省があり、自己の存在の徹底せる自覺があつたからである。勸化才大に

かなしきかな。かなしきかな。いかゞせんいかげん。こゝに我等如きは、すべて還展悲の三学の惑に非ず、この三学のほかに我が心に相應する法門ありや、我が身に堪えたる修行やある。云々

と述べられたこの言葉こそは、上人が自己の機根の劣れるを歎き悲しんでの告白であり、徹底する自己の絶望であり、十惡の法然、愚痴の法然としての無慚無愧の事であり、念仏往生を

は

悲しきかなや。善心はとしぐにいたがいてうすくなり。悪心は日々にしたがいていよいよまざる。さしは古人のいへる事あり。煩惱は身にそへる影、さるむとすれどもさらず。菩提は水にうかべる月、とらむとすれどもとられず。

と己の罪業の深きに悲しむ。宗教的自己の罪の自覚が、善導の兢全戒の「一心専念弥陀名号、行住坐臥、不問時節久遠、念々不捨者、是名正定之業。順彼仏願故」によつて、救いの道を聞かせるのである。かゝる宗教的罪業性の自己の自覚は、相対的なる自己を徹底的に追求し、相対的自己の遂に至りつく所、自己の無自覚を自覚するにあり。宗教的自己の奥の奥の姿を知る事の出来なかつたのを知る。こゝに徹底する絶対の境地に於いて、愚痴の法則をしての自覚があるのであり、こゝに宗教的実存への道が開かれるのである。宗教的実存の事とは、自己の本末眞實である所の現実存在であり、それは主体的、自覚的かつ超越的存在でなければならぬ、日常に於ける自己は本末の自己から見れば非本末の虚偽存在であり、煩惱の炎のために眞實の自己がなく、自己の自覚に於いて全く無知である。

清浄たらうとしてしなり得ぬ五逆惡世の凡夫としての罪業甚重の衆生としての自己、眞實本末あらねばならぬ自己の現実ばかりは確かな事である事を知らなかつたと云う事を知る。そしてかゝる存在を超越せんとする所に宗教的実存の道が存すると考へる、こゝに於ける超越の困難は上人をして悲歎の底に落し、自己の力によつては如何ともし難きを知り、唯仏の本願によつてのみ、絶対他力によつてのみ達せられると考へられに至つたのである。

浄土へ往生する事、即ち超越とは仏のまします国へ行く事である。しかして仏の国上は阿耨

陀至に

南無阿耨多羅三藐三菩提。從是西方過十萬億那由他諸佛土。有世界名曰極樂。

とある如く、阿耨の往する相對的世界、煩惱界とは無限の距離があり、仏と阿耨との實際距離である時を示すものであるが、口に南無阿耨多羅三藐三菩提を唱へる時、絶他者たる阿耨多羅三藐三菩提は本願を信じて口に念仏を誦する時、そこに仏と接觸し得るのである。廻至には、

南無阿耨多羅三藐三菩提。汝今知不阿耨多羅三藐三菩提。

とあり、南無阿耨多羅三藐三菩提と誦するその時に於いて、自己は既に自己でなく、今現在に仏の我、絶對者の我としての自己、なりであり、これこそは宗教的生存の姿と云へよう。

南無阿耨多羅三藐三菩提といふは別したることには思ふべからず、阿耨多羅三藐三菩提はとて、我をたすけ給へといふこととは心得て心には阿耨多羅三藐三菩提とけたすけ給へとおもひて、口には南無阿耨多羅三藐三菩提を唱へるを、三心具足の名号と申なり、

と勸化光二十一にある如く、南無を助け給へと受容し、心にも助け給へと思ひ、口にも助け給へと唱ふる相對者の呼声に呼応して、絶對者は答へ、相對者を救われるのであり、南無阿耨多羅三藐三菩提の名号の中には煩惱具足の相對有限なる阿耨と、絶對他者にして無限なる阿耨多羅三藐三菩提の絶對に矛盾せる存在が、矛盾せるそのまゝに於いて南無と誦するその時に阿耨多羅三藐三菩提の中の否定的自我であり、阿耨の心越中にある阿耨多羅三藐三菩提と云う相互循環的に働き合うものであると云えよう。絶對の他者は自己を含むものでなければならず、自己の自覺に徹する所主体より客体へ、客体を通り越して主体へ転入する。阿耨が仏へ没入し、仏の立場より阿耨をふり返る所の絶對矛盾の同一の形に於いて、絶對の南無があり、かゝる見解に立つて南無する事が法然上人の口誦の念仏の

事なわけではなかつたかと考へるのであり、かゝる事に於いて南無阿弥陀仏を称える事が宗教的
実存の事と考へるのである。

（研覽室、四回生）